



新局玉石童子訓

貳



1279
17



新局玉石童子訓卷之一下冊

第三十二回

書刀を界して弘元母子と托を
寺僕も憑く両少義姑を知る

却説職善疑似の惑ひを織林も罪有りける。乙藝六市四摠と俱小獄舎へ
敷承れり九四郎が宿所を柳工們の居を饒されを里人等是を守りて九四郎が
安藝の嚴嶋よりかゝ來身と待てる。介程九四郎が乾見考へ這禍鬼を散馬
怕れて皆慨しく思へも亦連累の罪と怕れて謀の所を知らず。里長も相
譚き獄舎の飯を餽る。有徳事を知らずも九四郎が来る來に必擲擲ら
とる。非如日數の麻止るも還を欲得とら不娯て路遙る西の盡處へ言ひ
遣え春の雁の翅をければ徒お心苦しく思ふも或の己が蜂吹く故不崇と怕れ
畧計別して深切始の如くるを事假托け他所移りて疎濶なるも多かり



ける。あの餘の憂と分つ足然る宛親族も。只九四郎一個の弟あり。峯張六郎通能と喚做して。今茲の十八歳の少年あるも。峯來其兄と同居せ。連累の罪を免れしける。住吉の里長は是切ても。幸と思へ浪速の陣。便宜を俟けり。然る是時住吉の里と距ると十町許る村落の字を小松と喚做。ある寒村。由來山孟林寺と號する一座の小梵刹あり。住持木隱和尚。藝國の人氏備中。大江弘元の度兄を拜られ。其の寺大江氏由縁あり。先住木隱和尚。近曾遷化して。今其徒弟木玄道德住持され。猶昔の餘波。大江氏と疎を。今も其坊料を。師檀の好絶と。あどて弘元四男。大江四郎成勝。の孟林寺に寄宿して。安藝へか。既され。亦二八歳の少年。馬の枝を疎ら。武藝文学。其師に就て。習讀書を。

幼稚より。怠るる。竟文武の達者。久後。後瀨。この四郎成勝。親も世に捷れて。現小美少年。見れば。見る人。言ぬ。この四郎成勝。親胞兄弟。相別れて。這頭長と成。看官評り。思ふ。亦故あり。抑十三屋九四郎峯張六郎。兄弟の親を。峯張九四藏通世と喚做。素是信濃退糧見。岐岨路を去。浪速。兵法七書。人小教。僅。口と。程。其妻。三個の兒あり。初子の則。女子。名。億祿。と喚。既。二八。を。心。操。を。怜。利。く。縹。致。も。亦。人。小。勝。れ。り。次。の。兩。個。の。男。子。也。郎。と。染。六。大。當。時。大。江。弘。元。の。尚。壯。年。を。り。け。れ。京。師。の。光。景。も。明。く。知。る。べ。し。治。乱。も。探。ら。る。思。ひ。伴。當。一。兩。名。と。地。浪。速。小。松。の。孟。林。寺。宿。め。淹。留。年。と。程。那。峯。張。九。四。藏。が。講。入。り。他。日。昔。春。の。日。は。資。を。断。金。の。思。以。流。り。け。れ。九。四。藏。も。其。恩。義。を。感。と。主。の。旅。宿。の。徒。然。

恨いけれ。いも果さぶと位くと叱り林示むる二親もかき思ひをりかき山所流
 ま溪水の流むらさう一誠心の清言葉小見れけり。當下弘元威どて已まむ。
 とくは答るやう。今創ぬ親子の真情開を知らざるあねども。正用の花を
 人も見せ埋木小做るえ。最惜さ思ひ憶を云云といひ口の過るに今午方
 弘とも甲斐支。再會の口天小儘せん四郎が上と憑むの。慰められて本意ある親
 心才小解ぬ。春の淡雪をらねも松小祝ふ。留別の酒五準備の酒菜合ふ。く
 九四郎。小圓坐まつ是時。年十五六あてし。藝と喚做さ。食客女酌と執事東道
 態小弘元も情うち笑れて。献り酬り。飾程小酒外。甘味茶六も是時。年尚五。四郎
 君あり二歳の兄を。寄されて大人やう小。鯛小儲。宙小堂の愛々も弘元も主人主婦
 共侶の憶が笑局小入日刺ま。紙牒ある次の間。弘元の伴當。既小九四郎小召登
 されて。残飯餘散の音待あり。各飽も飲啖も俱小薄酔らぬ。徳而在る

弘元あらされ弘元。我番とま。酒盃と辭し。茶と請て。告る別の詞。寡く。刀を
 せり。撥合て。去ま。ま。程小九四藏。夫婦の留難。只再會と契る。億禄の
 胸の塞りて。のま。く。や。弘元。推林。示めて。伴當。と。ゆ。遠。く。孟林。寺。へ。か。の。ま。の。の。
 片折戸の頭。あり。兩個の伴當。褰結して。跪居て。主の出ると待けり。當下九四郎。那
 御寺まで。送らんと。出ると。弘元。推林。示めて。伴當。と。ゆ。遠。く。孟林。寺。へ。か。の。ま。の。の。
 宵の装束を。敷きて。木隠和尚。小年来の。止宿の。ぬい。を。舒相別て。曩小安。藝。ま。の。従
 ひ。來る。伴當。僅小兩名。と。ゆ。て。其。曉。天。小浪。速る。馬頭。上。小。便。船。お。て。水。路。我
 西へ。の。程。小。又。峯。張。九四藏。通世。其。子。九四郎。と。共。侶。小。甲。夜。より。風。小。車。來。て
 弘元。と。待。て。在。り。弘元。が。來。ぬ。小。及。び。て。准。備。の。裏。飯。尊。酒。と。用。ぬ。く。又。恬。不。志。と。甚。磨。る
 程。小。九四郎。の。女。兄。億。禄。の。弘元。へ。ま。わ。る。書。翰。一。通。を。呈。覽。を。左。右。の。程。小。横。雲
 低。死。水。や。天。風。波。噪。く。黎明。時。小。今。纜。と。解。くと。叫。ぶ。舵。工。の。訛。聲。屢。言。向。け。れ。便



玉石堂子川巻下

九四

九四郎



玉石堂子川巻下

九六

船の仍客爲擧馬うされて聚い來り弘元主僕の遠く俱に其船の乘程ふ峯張
九四藏九四郎に於是僅水送の志を致せども惜む別の果敢るさふ立盡ぬ家
浦曲の松の待より歸來の時幾ともあらず浪舟任せてもあらず澳津帆の見えざる
まで目送りけり抑這箇一條の前小寫去一朱之众乙其藝云ちが囚牢の敷糸より
段より十四五年上の昔話で大江四郎成勝峯張六郎通能主僕而少年此
出處來歴を備小寫一せざる是より下も又孟林寺の段復も右の續ける過去
來の話説るを知る一因て憶ふ本傳お説く所昔年陶瀬十郎與房が深草其
茶店を情妓阿夏と其子珠之介小相別る折の事の趣と今又大江備中弘元
が側室億祿と其子四郎小留別の事の趣と相觸る所あらず君子小人貞女淫婦の
情態恰雲壤の差別あり彼ら則秘密の哀別親子の甲小黥印を再會の
徴せしめ後竟の本意を遂て骨肉相逢のさるるを最後小其子家を絶時と

志とほねれども這親子の行状邪淫の起り邪淫の盡這故に鑑鏡さるる
敗れて滅族の禍をたるとはざるべし又弘元の傲を所億祿は是れ小仕る所俱に邪淫
の起る其相別る時臨て弘元則其子小昇ま照書一通と先祖相傳の西
刀とのま武士たる者の真面目人小對して説きたる意中の秘事毫もあらず
あれども夫婦父子命の長短各差あり後竟小再會の本意を遂せるるとも
其子小果して兩個の舎兄と次負けて家と負まらるる是則善と勸め悪と瘡
本傳作者の大関目隱微を閉じて看官と覺まらるる邪阿夏朱之介母子の根
藪邪慾と旨と綴りて時好小具る筆をのぞく見果むと評する者
あらん欲とて漫小贅言をぬるの然とて天機を漏さぬは口は是光陰深
らん狭間話休題弘元安藝へかゝるより光陰又按の如く四稔許
ゆる程大江四郎八年七ふるり外祖峯張九四藏其師を擇て習書

二二〇 二二一 二二二

教え創る九四藏が孝子六郎は是時年九歳他は腋子の陪堂とて俱く讀書を習はせ四郎が其師許に折衷必伴不立せけり是より又鴻雁かへる玄鳥まで四郎が九歳とる春の時候より弓馬撃劍何れも武藝と学する六郎相従て其師と俱く折衷戦國の習俗を市井村落中の武藝の師とる者小賈かを矧又大江四郎の生るが文武の才あり六郎亦思慮するが久しかりて習学問の才あり大刀合さる技も人の勝れて見えり九四藏夫婦の缺けの憂へもあつた億禄も是小慰て猶久後を俟かひゆる弘元が安藝へかへりより六松有餘を歴ねれども風の便り一むゆあ絶て浪速の浦の山船も入船も外の噂とて億禄の單幾とて思ひ細り一氣積の疾病積温て後竟病の状不就より鍼灸藥餌の驗る尚杪若干五の井や迎へぬけ其曉の夢覺て那身空しくあか二親胞兄弟の歎にゆら四郎の九歳の童れも孝順特小浅らねる母親枕

就より間々時々身邊を離れざる拍腰さ麻りの湯液を唐の藥を薦めて看病り一甲斐も涙の種の果に流て逝水のかへぬ人お做りより俱く死べ哭泣る孝子の薄命憐むべ幸なれ只足の三つで其次の年三月の時候より九四藏夫婦の温疫でち續てて身故り九四藏の年六十妻は五十有餘るべ尚憑しく思ひたり九四郎六乙藝者の哀悼悲位に九庸は過て里人も是が為不弦歌と林杵相吊りて柩を送らざる者ありけり然るを大九四郎の頼む樹下小漏りて哀感の袖乾く間をさやく小忍びひびて七七の昔本参も九四郎染六と俱く既めて九四藏在るより一より兵法の弟子の胡越の如く有りておたぬ是時九四郎の定めたる活業をせられ小松村の邊で親の購求ゆる人小預けて耕せぬ此の田園あり貯禄も亦る不あらぬ次の年の夏は里人の賣屋あると購ひて恥く其里移徙して木櫛を賣て生活を且て藝を

のて妻ふく。とく内を任せけり。這婚姻の事いある。二親生平九四郎云云といひ
 其あり。其送言依てるべし。介いあれども九四郎の疎人を文学と好まむ。敵る劍
 自打の人並で。其性素より義侠あれ。武家仕て五斗米の腰を折るを樂
 り。然りとて又商賈の束ぬると迎へ還ると送る。利潤を肩とも思ふ。その故外看
 なるの。店舗の僅に二兩個の備柳工を在らせて。他も木櫛を賣する。闇のヨ
 からのを患とせむ。九四郎が約状大聚かか。の如く親九四藏同からぬ。且這夫婦
 尚少けむ。四郎腋子の事いある。九四藏縁九四郎の定む。送教中の九四郎も亦
 孝順るれ。敢親の送言違は。是年の秋の時候。早孟林寺詣て。木隠和尚
 云云と四郎の上と送る。初弘元の別小臨て契り。一言の顛末と照書の。両刀の
 支養育料の金子の。ま。自他と。り。叫。告。既。知。ら。ぬ。如。く。大。昨。年。と。り。打
 續て。俺。姉。も。二。親。も。世。在。ら。ぬ。り。か。が。尚。年。少。る。小。人。夫。婦。が。よ。く。守。育。ぬ。る。

わらむ。然らば。腋子の名家の。流。人。と。成。ま。い。可。惜。あ。ら。ぬ。衣。食。の
 小人。餓。り。て。今。より。御。寺。へ。召。執。て。教。育。あ。ら。む。亡。親。姉。の。送。言。を。果。す。の。と。る。を
 大江。大人。の。教。育。も。稱。ふ。く。や。い。ん。這。は。誰。何。と。談。話。れ。木。隠。の。點。頭。て。其。茶
 去。る。後。四。郎。が。弘。元。の。名。を。も。り。久。し。く。あ。ら。ぬ。他。の。俺。任。る。何。で。不。衣。食。の。財。を。望
 ん。心。を。係。る。弘。元。が。安。藝。へ。か。り。去。り。も。今。至。り。て。信。守。那。地。小。異。変。あ。ら。ぬ。思
 ふ。の。の。から。海。山。千。里。を。隔。て。居。戦。世。の。不。自。由。の。事。何。せ。然。ら。ば。俺。弟。の。頼。り
 る。を。今。ゆ。ら。不。の。字。と。の。死。拙。僧。ら。ぞ。ま。の。心。安。か。る。べ。し。る。れ。も。四。郎。の。總。角
 る。小。那。身。單。と。寂。莫。と。る。寺。に。在。ら。せ。ん。不。便。之。和。殿。の。弟。末。六。を。共。信。お。か。て。玉
 へ。客。あ。る。折。茶。の。給。仕。の。隙。より。欲。り。好。食。客。を。と。あ。る。れ。と。又。他。事。も。る。老
 和尚。の。答。ふ。九。四。郎。歎。ひ。兼。て。明。日。と。契。て。退。け。り。却。説。峯。張。九。四。郎。其。實。四。郎
 と。末。六。乙。共。藝。と。喚。取。て。今。日。孟。林。寺。の。木。隠。和。尚。小。商。量。を。存。る。事。の。趣。を。同。様。を。

茶六が為の目暮春錢と嘘與ると然らば這童子主僕内外かの知覚部助の
 俱小其才小賈からねば文武の學術年小從て薦むとのことなり。介程小這主僕寺小
 在るの四稔有餘五稔と公秋の時候木隱和尚遷化を其徒弟木玄道
 徳後住小做りぬ這木玄も老實兒を師父の遺教小叛とて四郎茶六等
 相憐々管待初小変ねば四郎はさるる茶六も俱小憑志死心地とて之
 武藝を励まけり。然る而其次の年峯張茶六十八歳大江四郎十六歳小
 做りぬ是時王僕自撰て四郎其名を成勝とて茶六郎の通能と名告ぬ又
 只その毛のさるらむ大江四郎の孟林寺を長と成ぬる少年るれば人或の緯跡と
 孟林四郎と喚做りけり。然るを後みづから茂林四郎と稱する日もあり。又俗
 字小從て杜四郎ともいひけり。壁言へ峯張九四郎が緯跡を十三屋とのが如し
 九と四を合されば十二孟林大江の廟號を其茂林といひ杜とのも是れ由り

知るべし。間話休題。是年の夏及四月盡ふ十三屋九四郎の講野家と共
 侶小安藝の嚴嶋へ詣ると四郎茶六木玄道德小告別小あまはけは其後
 のまゝ久しからず。那家小不測の祟あり。往日より十三屋小止宿の旅客朱之
 と喚做を青年兒が。乳守の里の妓樓を今様と致ぬ娼妓と刺殺したければ
 那身へ矢庭小捕捕られ其歇店主九四郎の妻也。藝乾兒六市四摠は浪速の
 囚牢小敷糸とて住吉の里人多が。悄地小孟林寺小来て報一ぬ四郎茶六の駈馬
 此のひらへ木玄道德も眉うち頻單て其事の顛末を尋る小実小是疑獄ぬ。
 那旅客朱之小とやらんと除の外乙藝六市四摠を冤屈するあり疑ひるし。
 ありとて茶六も浪速の陣館へ推参して。その毛を陳て嫂等の救免を請
 ちらんとて惴りて住吉の故老推林めて其毛究るを用人の中必禁獄せし
 是九四郎大哥のかりまざるに及て幸るるのを。和郎備物て自訴ある毛を

吹と疵を求むる其故は箇様々々如此々の情由ありとぞ。那鐵屑鍛冶郎の古
命が哄騙の事の顛末を尋らる隨ふ叫び告ぐ。他の近首周防の山口にて捕
捕られぬと風声あり。この故の三好の刀祿の朱之介と大寺の舌命が伏家と
と御疑ひの深ければ、嫂々を當坐の保質ふこそ。儘林示置る人然に大寺も
朱之介も鐵屑が伏家とらむと正しに照据微り。彌勒の出世の遇ふま
も嫂々を救ひ申がけし其頭あらうと叫び示してその後、五林寺へ訪
來む。朱六も四郎も白昼の面を顯して住吉の里にたれ往還をなすと、饒
縁の這兩個の少年の又一層の眞愛を増す。いふせまうと相譚の謀の出
る所を知らむ暮るを俟て悄悄地の住吉の里へ赴く。此藝者の安危は傍
す。頼て囚牢へ飯を餽る人も人傳るれば自由ならん。左右まゝ程、五月の過
暑熱弥増、六月も既の中旬あるゆれど、九四郎のいさゝか還らむ。講伏家の甲

ひの歸村の噂ありと探せぬ。九四郎へ治比る。相識許立よると一路人と
別して然ども五六日を経ば必死の處へとらむ。人の傳ふやえけり。安不
知る本意をなれども、かかぬとせざる。召捕らむ事のあらむと思へば是も
胸安からむ。只那犯人朱之介の大和の市の御より來りける旅客也。其舊
里の妻もあり。岳母もあり。其事情僅に尋らる。四郎朱六も其の妻を任
持木玄の叫び告て、咱も悄悄地の大和へ出て、那朱之介が宅眷を訪て、他
林示獄せられしと詳し告もあつて。他が出處來歴と路費の金のヨヲかゆを
撈訂さる。俺嫂の罪を償ふ足りのやせんと思ひぬ。其宅眷と知る
人らぬ。少年の俺們が那地を造りて談するも。訝りく實を報られぬ。あ
亦勞く功なき所為人。御意見のやいと。同へ木玄點頭て、開い究竟する
人とそれれ和殿も知る如く。前月より當山へ新参る。奴隷柿八と大和の



木玄の方丈
 柿八両少
 年と密話を

四郎

かき八

四郎

かき八

